

原発汚染水 (ALPS 処理水) の海洋放出を直ちに 中止することを求める水俣アピール

2023年8月24日、東京電力と日本政府は、東京電力福島第一原子力発電所敷地内のタンクから事故炉から溢れ出た原発汚染水 (ALPS 処理水) を海洋放出しました。

私たちは、下記の理由から、この海洋放出を即刻中止することを求めます。

また、水俣市議会は、2023年9月議会において、海洋放出中止を呼びかけることを提案した議員の質問を根拠も示さず、多数決で大幅削除し、議事録から消し去りました。このような会議原則を無視した乱暴な運営を許した議長に強く抗議するとともに、賛意を示した議員各位に猛省を求めます。

加えて、チッソ工場排水による海洋汚染が原因の「水俣病」を経験した水俣市は「水俣病の教訓発信事業」を市の重要政策として掲げ、年間4万人近くの学習旅行者を受け入れています。にもかかわらず、市当局は福島原発「汚染水」(ALPS 処理水) 放出に懸念すら示さず、同じく市議会は、これに疑問を投げかけた議員の質問を数の力で消し去るという暴挙を行いました。水俣市の「教訓発信事業」は実行が伴っておらず、口先だけであり、同じ水俣市民として、極めて残念です。

ここに集まった市民は、改めて本シンポジウムの名において、日本政府と東京電力に対し、海洋放出の即時中止と、英知を結集した代替策の実施を強く求めます。

記

1. 水俣病は「有害な物質でも薄めて流せば大丈夫」—ではないことを示した未曾有の公害事件です。ご承知の通り、一度薄まったはずの有害物質が、食物連鎖によって再び濃縮され、それを常食した人々を死の淵に追いやりました。死に至らずとも、生涯水俣病特有の症状に苦しめられる人を数万人単位で生みました。
福島第一原子力発電所は、爆発事故によって燃料棒が溶け落ちた状態が12年経過した今も続いています。その溶け落ちた燃料に直接触れた地下水や冷却水がALPS 処理された上で、敷地内のタンクに貯められています。これらは通常原発からは発生しない特殊な核排水で、生物や地球環境にどのような影響があるか全く未知数です。世界的に見てもこのような性質の水を海に流した例はありません。
水俣病では、魚が原因であることをいち早く突き止めたにも関わらず、「すべての魚が汚染されているわけではない」ことを理由に、漁獲禁止の措置が取られませんでした。また、工場排水が汚染源である疑いが濃厚になっても「原因物質が特定されていない」と10年間排水が止められませんでした。その間に被害はどんどん広がり、深刻になりました。ここから学ぶべきは「疑わしきものはとりあえず排除する」つまり「予防原則」を適用することです。
生態系への影響が「未知数」である原発「汚染水」(ALPS 処理水) は、「予防原則」に立ち、環境中に流すべきではありません。
2. 東電と日本政府は、敷地内のタンクをこれ以上増やせないとして海洋放出に踏み切りました。しかし、その決定に至るまでに、複数の専門家が海外での事例などを示し、海洋放出に頼らない方法を提案していました。日本学術会議も建設計画がなくなった 7、8 号機原発用地をはじめ敷地を確保すれば、タンクの増設はできるとした上で、長期陸上保管しながら放射性核種の寿命を待ち、危険性を低減していくことが現実的だと指摘しています。
東電と日本政府はこうした海洋放出以外の方法を真剣に検討し、環境中に出さない努力をしています。正に、国民の命、健康、生業より加害企業の都合を優先した水俣病の再来であり、決して黙認することはできません。

3. 水俣病は、汚染された魚を食べた者がり患する病気です。したがって、水俣市近郊の魚は売れなくなり、漁業が成り立たなくなりました。同時に、病気発生のプロセスが解明されるまでは、「風土病」「伝染病」とのうわさが広まり、野菜、くだものも売れなくなる、結婚や就職を断られるなど、いわゆる「風評被害」による差別で二重三重の苦しみを経験しました。

水俣の「風評被害」は、水俣病は「伝染病」と「誤解」されたために起こりました。この「誤解」は、チッソが工場排水を「疑われた」時点で即停止し、積極的に原因を明らかにし、率直に謝罪していれば起きなかったものです。しかし、当時のチッソは、漁民にわずかな見舞金を渡して口を封じ、その後も排水を流し続けました。さらに、病気への偏見や補償金目当てのニセ患者がいるなどの噂が市民同士の分断と対立を生み、世間の目を真の加害者から反らせました。

母親の胎内で水俣病にり患した「胎児性患者」は、諦めばかりの人生を振り返り、「なぜ、もっと早く工場排水を止めてくれなかったのか」と嘆きつつ、つらい年月を重ねてきました。

私たちは、水俣と同様のことが原発事故周辺地域で起きることを強く懸念します。福島県漁連はじめ、多くの漁業関係者らが海洋放出に反対する決議を繰り返したのは、まさにこのような事態を心配していたからに他なりません。政府もこれを受けて「関係者の理解なしに海洋放出は行わない」としていたはずです。

にもかかわらず、現地の心配を撥ね付けるかのように海洋放出を強行したことは許されません。さらには、マスコミを使って、放射性物質は IAEA の定めた「基準内」に薄めて流しているから「安全」と宣伝し、「風評被害」を招く原因が「汚染水」という「言葉」であるかのように装って、口封じをしています。かつて水俣市で起きた光景を目の前で見ているようです。

国内でいくら安全キャンペーンを張っても、事故炉から漏れ出た水を海に投棄していることは世界中に知れ渡っています。事実、南太平洋諸島フォーラムはこの海洋投棄に対し、「健康や安全に対する核汚染の潜在的脅威について首脳らは強い懸念を抱いている」との声明を出しました。世界から不安視されている海洋投棄をし続ければ、日本という国そのものへの信頼が揺らぎ、福島のみならずその影響は全国に及ぶ可能性すらあります。こうした影響は「安全を疑われるものを流さない」ことで回避できるのであり、私たち水俣市民は、ただちに海洋放出を中止することを強く求めます。

そして、熊本県民、全国のみなさん、原発推進勢力による偽りの「安全キャンペーン」・「風評被害の脅し」を撥ね退け、私たちと私たちの子孫が暮らす地球環境を守るために共に声を上げていきましょう。

2023 年 11 月 23 日

海洋放出は他人事ではない！水俣から「汚染水」を考えるシンポジウム 参加者一同

-----【シンポジウム賛同団体】-----

きぼう・未来・水俣	新潟水俣病患者会
熊本県民主医療機関連合会	平和・民主・革新の日本を目指す熊本の会
グループ原発なしで暮らしたい・水俣	原発ゼロをめざす水俣の会
原発なくそう！九州玄海・川内訴訟熊本原告団	水俣協立病院
原発避難計画を考える水俣の会	みなまた健康友の会
子どもの明日を語る会	水俣病互助会
さくら薬局	水俣病不知火患者会
さようなら原発 3.11 熊本集会実行委員会	水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会
神経内科リハビリテーション協立クリニック	水俣病東海の会
新日本婦人の会水俣支部	水俣病被害者互助会
全日本年金者組合水俣支部	水俣病被害市民の会
チッソ水俣病患者連盟	水俣病被害者の会
新潟水俣病阿賀野患者会	水俣の暮らしを守る・みんなの会